

藤元雅文専任講師

マイケル・コンウェイ専任講師

『選択本願念仏集』を読む

藤原正寿准教授

編集後記

真宗学演習Ⅲ（三回生）
『歎異抄』読解 三木彰円教授
『正信偈』に学ぶ 山田恵文准教授
臨床仏教としての真宗研究 木越 康教授

『歎異抄』に学ぶ―「序」から第十章
までの英訳を通して― 井上尚実教授

真宗学演習Ⅳ（四回生）

『歎異抄』 加来雄之教授
『歎異抄』 一楽 真教授
『歎異抄』 木越 康教授
『歎異抄』 井上尚実教授
『歎異抄』 三木彰円教授

『親鸞教学』第一二二号をお届けいたします。二〇一八年度前期号ですので、発行が一年半ほど遅れましたことを、深くお詫び申し上げます。また杉岡孝紀先生、小川直人氏より早くから原稿を受領していたにも関わらず、発行の遅れでたいへんご迷惑とご心配をおかけいたしましたことを、お詫び申し上げます。

西本専任講師は『阿含経』を読む清沢満之師の姿勢を確かめ、釈尊の興世の本意を聞き取ろうとする聞思の営みであったと位置付けています。小川直人氏は第一一一号に載った論考の続編として、親鸞の還相回向の捉え方について論じており、獲信者の上で還相回向の用きがどのような形で現れるのかという問題を追及しています。三池大地氏は『安楽集』における善知識の説示の仕方について確かめており、道綽が善知識を浄土に帰依することを勧める存在として理解したと論じている。

二〇一七年度の真宗学会大会では、本学から藤嶽明信教授が講師を勤め、学外からの講師として、龍谷大学教授の杉岡

孝紀先生をお招きして、開催いたしましたので、会員の皆様と当日の様子を共有するために、その講演録を掲載しております。藤嶽教授（現・名誉教授）は、「他力の仏道」という題のもと、親鸞が開顕した二種回向の思想の根幹を確かめています。また杉岡先生は二十世紀の解釈学におけるメタファアの研究を踏まえながら、親鸞が用いるメタファアの意義と、メタファーという視点が真宗学に持ちうる可能性について論じておられます。連載してきた金子大榮先生の「『教行信証』の諸問題」は本号をもちまして、第二十回を迎え、今回が最後となります。本号では、先生は「化身土巻」の末巻における議論の焦点について明瞭に解説されており、その難解な引用文を読んでいる上で貴重な指標を示しています。次号からは、本学における真宗学の学びを共有するために、他の講演録の連載を始める予定です。

本号における安田先生の「願生論」講義は実在と名言の関係性について論究されており、言葉や名は仮に設けられているものではあるが、実在を表すことができる時には、単なる仮設ではなく、そこ

に真実が現れていると述べておられます。

オレゴン大学助教授のジェフ・シユローダー氏は、清沢満之師、曾我量深師、金子大築師が、戦前に異安心と疑われながらも、戦後に真宗大谷派の教学の基調をなす存在となったプロセスについて英文の著書を現在、認めています。その草稿の中では、氏はトマス・クーン氏の科学史理論を適応し、三師を始めとする近代教学者が二十世紀の前半において一つのパラダイムシフトをもたらしたと評しています。クーン氏は「パラダイムシフト」の後の研究は、当分の間、その新しい枠組みに様々なデータを当てはめて捉え直す作業となると述べています。シユローダー氏の論では、近代教学者が親鸞思想を受け止める新しい枠組みを構築したことを受けて、現在の真宗学の営みは近代教学者が示した枠組みに様々な概念を当てはめる作業になっていると理解されています。

曾我先生が本誌を『親鸞教学』と命名した意図に思いをいたすと、シユローダー氏の説が、私たちの営みに対して痛烈な問いかけに聞こえてきます。まして

や、宗教離れが全世界的に未曾有の速度で増えていることを考えますと、私たちは、先哲が直面した危機より深刻な問題をかかえている時代社会に向き合わなければなりません。真宗学が、親鸞が開顕した浄土真宗を現に苦しむあらゆる人に真の救済をもたらすものとして世に開示する営みとなるように促す重要な指摘としてシユローダー氏の分析を受け止めるべきと考えますので、ここに読者の皆様と共有させていただきます。

(文責 コンウエイ)